

2. 研究の詳細

プロジェクト名	学級の授業改善につながる学びのユニバーサルデザインの実践		
プロジェクト期間	平成25年度		
申請代表者 (所属講座等)	納富 恵子	共同研究者 (所属講座等)	千々和 知子 (北九州市立南小倉小学校)

① 研究の目的

文部科学省の調査によれば通常の学級に、LD、ADHD、機能自閉症等、知的に遅れはないものの学習面や行動面、対人関係において困難のある児童生徒が6.5%学んでおり、彼らも含めたすべての児童生徒が、学びやすく、表現しやすく、楽しく取り組みやすい授業を実現する授業改善が求められている。

米国においては、すでに1990年台から、Center for Applied Special Technology (以下CAST)が、通常の学級で学ぶすべての子供たちが、一般的なカリキュラムにアクセスできるように教えることや、学びをユニバーサルデザインの視点で再考することをすすめてきている。

学びのユニバーサルデザイン (Universal Design for Learning, UDL) (Rose & Myer;2002) とは、実践的前提として、幅広い様々な学習の文脈のなかで、異なったバックグラウンドや学習スタイル、能力や能力障害のある個人にアクセスでき適切になるよう教育課程は代替方法を含むべきであること、ユニバーサルとは、誰にも最適な1つの解決策があることを意味しない。むしろ個々の学習者のユニークな性質と違いに対して調整する必要性に気づき、学習者にぴったりの学習経験を創造し、彼らの進歩する能力を最大化することを表す。

このような考え方は、通常の学級の児童生徒の学びの質を高めるための授業改善の一方法を示しており、日本での実践的導入の試行とその効果の検証が求められている。

すでに、千々和・納富 (2013) は、平成24年度までに、小学校算数科1単元において、UDLの実践を導入した学級としていない学級のニーズのある児童そのほかの児童で、単元での習得や算数科への態度の変化を比較した。その結果、UDL導入の効果が、ニーズのある児童だけでなく、その他の児童にもよい効果をもたらすこと、とりわけニーズのある児童の習得の定着率において明らかな効果を認めた。一定の効果が実証できたので、小学校算数科のUDL導入のために、新任教諭やキャリア段階の異なる教員に対してコンサルテーションを行い、その効果を検証し良好な結果を見出した。

そこで平成25年度は、前年度までの研究成果を日本LD学会で発表するとともに、この分野の日本でのエキスパートによる外部評価や助言を受け今後の研究の進展や普及に関する方向性を明らかにすることを目的とした。

② 研究の内容

申請者と教育委員会から本教職大学院に派遣された現職修了生が、米国の研究機関CASTで開発されたガイドラインをもとに行った「学びのユニバーサルデザイン」に基づいた授業実践 (UDL 授業実践) の事例に焦点を当て、その効果やコンサルテーションを通じた波及について学会や研究会で発表を行い、外部からフィードバックを受け今後の研究の方向性を明らかにする。

研究を継続し発展するための研究会組織を立ち上げ、学校現場への普及や実施にかかる負担軽減や効果測定を容易にする手法の開発などについて定期的に協議し研究を継続推進する。

また、米国におけるUDLの理論と実践について、米国における教員養成段階の教科書の分析と申請者と共同研究者の試行に関して概説論文を執筆する。

③ 研究の方法・進め方

UDL の授業実践をより確実に高度化していくために、申請者と共同研究者で、福岡 UDL 実践研究会を立ち上げ、定期的に研究会で授業実践のまとめや波及のための講習会を行うことにした。

まず 2013 年 8 月 12 日には、東京大学先端科学技術研究センター近藤武夫准教授を本学に招聘し、これまで小学校で行ってきた UDL 授業の実践およびコンサルテーションの授業事例について、成果発表会を行い助言を受けた。助言により UDL3 原則の基づいた授業の構想に加えて UDL 授業におけるテクノロジー活用の意義（即時性、準備性）について認識できた。

これをうけて、協力小学校で、共同研究者により電子黒板を活用した UDL 授業を実践し、申請者が助言者として UDL 授業の意義について小学校の参加教員に解説を行った。

研究成果の公表としては、2013 年 10 月 13 日に、日本 LD 学会第 22 回大会において、「学びのユニバーサルデザイン」を授業に活かす Part III～多様な学びを実現するには？ 日・米からの実践報告～に対し申請者が指定討論者として日本における導入における疑問点に関して議論を深めた。

また 10 月 14 日には、共同研究者と連名で、UDL 授業の実践へのコンサルテーションについてポスター発表を行った。

さらに、今後の UDL 授業の質的改善のためのテクノロジー活用について障害のある人へのテクノロジー活用に関するカンファレンスである ATAC カンファレンス 2013 京都に参加し、情報収集を行った。

④ 実施体制

申請者および 2 名の小学校教員および実践協力小学校で実践研究を行った。

また、外部からの指導助言者として、東京大学先端科学技術研究センター人間支援工学分野近藤武夫准教授に協力を得た。

⑤ 平成 25 年度実施による研究成果

以上のように学校現場と連携を行いながら共同研究を行ったことから、UDL 授業の実践が協力校に広がり、協力校の UDL 授業実践とコンサルテーションに関する学校教育論文が教育委員会から銀賞の評価を受けた。

また 2014 年 3 月東京で開催された UDL 情報センター主催の研究会に、申請者と共同研究者が招聘され発表を行い、日本において UDL の実践で初めてエビデンスを出した研究であることを評価された。

申請者は、以上の実践をもとに UDL の理論と実践の概説論文を執筆した。

⑥ 今後予想される成果（学問的効果、社会的効果及び改善点・改善効果）

学問的効果

これまで日本で実践されていたユニバーサルデザイン授業は、一定の効果があるという印象はあるものの、効果の検証やその基礎にある理論についての言及が乏しかった。申請者らが実践している UDL 授業は、その理論が明らかであるため一般性や波及性について有利であると考えられる。

また、これまで、ユニバーサルデザイン授業の効果検証に関する実証研究は日本になく、申請者らが初めてエビデンスを示したといえる。

社会的効果

これまで、海外で効果があるとされてきたプログラムの日本への導入に関しては、海外と日本の学校教育の実態の違いから、円滑な活用が難しい場合も多かった。申請者らの実践研究は、日本の学校現場の実情に合わせて導入を工夫しており、学校現場の受け入れについて容易ではないかと考えられ社会的な効果が大きいことが予想できる。

改善点

外部評価者の助言にもあるように、UDLの円滑な実施には、デジタル教科書の活用など、テクノロジーの活用が欠かせない。この分野におけるさらなる情報収集が必要である。また、今回の実証は、小学校算数科に限られていた。中学校や他の教科での実践研究や効果実証も必要である。

⑦ 研究の今後の展望

福岡UDL実践研究会を継続し、新しい研究成果の公表を日本LD学会で行っていく。
異なる教科や、中学校についてもUDL授業が有効かについて実践研究をすすめる。
また、小学校算数科のコンサルテーションの成果について論文として投稿を行う。
UDL授業実践の導入を容易にするアセスメント手法について開発を行う。

⑧ 主な学会発表及び論文等

指定討論

納富恵子

日本LD学会 2013年10月13日自主シンポジウム

「学びのユニバーサルデザイン」を授業に活かす Part III～多様な学びを実現するには? 日・米からの実践報告～

研究論文

納富恵子 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報第4号 平成26年3月 33-40

「学びのユニバーサルデザイン」(UDL)の理論と実践—米国における教員養成段階の教科書の分析と算数科における試行—

○本報告書は、本学ホームページを通じて学内外に公開いたします。

○本経費により作成された成果物や資料等については、必ず全て添付願います。